
God's caprice

折原奈津子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God's caprice

【Nコード】

N1666T

【作者名】

折原奈津子

【あらすじ】

いづどんなどころで、どんなシュチュエーションで出会ったのかも記憶にない浩太郎。

目覚めると、隣に眠っていた彼も自分も何も身につけておらず・・・。

An important personのスパインアウト。

綾乃の先輩、三浦理子さんのお話・・・。

1話※R指定有り

それは、ちょっとした神様の気まぐれ……。

浩太郎と出会ったのは、23の時。

どこで、どんなシュチュエーションで、そんなのはまったく覚えてない。

それくらい記憶に残らない、どうでもいい集まりだったんだと思う。

きっと、友達の母親がやっているバーのイベントでスタッフが足りなくて、1週間だけヘルプした時なんだと思う。

そんなところでのバイトなんか経験なかったし、緊張してたし、お酒も飲んで歌って……。

だから、まったく記憶にない。

なのに気付いたら、同じベッドの隣には浩太郎が眠ってたんだっけ。

『なんで……つうかこの人、誰』

気持ちよさげに、ぐっすり眠ってる彼は……。あたしがシーツを引っ張っちゃったからスッポンポンなのは丸分かりで。

いや、その前に、あたしのブラとショーツはどこへ行った。

あれ、めっちゃお気に入りなんだから！

インポートだし、高かったんだから！

シーツをずるずる引っ張って、ベッドの足元とかに散らばってないか探してみるけど見当たらない。

落ちてたのは、彼のボクサーパンツ。

バスルームなのかな……。と、シーツを引きずったままいこうとすると、背後から声がかかる。

「探し物は、これ？」

恐る恐る振り返ると、彼の手には探していたあたしのお気に入りのお下着1組。

『返して！』

ひったくろうとすると、その手がすいっと避ける。

『ちょっと！』

「返してもいいけど、こっちが先」

『は？な・・・・・・・・』

手首をつかまれて引き寄せられたのは、彼の腕の中。

あっさり押し倒されると、彼の唇が降りてきてあたしのそれを蹂躪していく。

何度も何度も角度を変えて、どんどん深まるキス・・・・・・・・というより、これじゃどう考えても体液の交換じゃん！！ってくらい、嚥下しきれないどちらのかも分からない唾液が零れ落ちていく。

しかもね、やたらと上手いのよ、この男。

キスだけでこんなに気持ちいいのって初めてなの。

歯列や上あごを摩る舌先が、あたしの舌を絡め取る。

逃げようとすると、強く吸われてあたしの舌は彼の口内に吸い込まれてしまう。

おとなしくキスに応えると、またそつと歯列や上あごを微かに刺激する。

そうされると、なんだかぞくぞくしてきて・・・・全身の力が抜けてしまう。

「やっといい子になった？」

そう言うと、耳朶に舌を這わせる。

同時に胸の周りを指先で摩り、登頂部を目指す。

親指の腹が、微かに先端を撫でていき、二本の指で挟みこみ摘み上げる。

その間に彼の頭は、あたしの首筋に埋まっている。

『やあ・・・』

「理子のりこ・・・」

散々喘がされて、ベッドに染みを作るほどに濡らされた身体は、屹立した彼の分身を余すところなく飲み込んでいく。

朝だというのに、かなり激しく一番奥を攻め立てられ、突き上げられる。

そして、身体が一番奥で、彼の熱が放出されるのを感じていた。

しかもそれをあたしの身体は、嬉々として子宮のずっと奥まで飲み込んでいく。

足りないというかのように、締め上げて搾り取っていく。

それにあわせるように、再び硬化していく彼の分身に揺さぶられる。どこで出会ったのか、どうしてここに一緒にいるのか、それすらも定かじゃないっていうのに・・・朝から2ラウンド目って冗談で

しょ？

っていうか、中出し！？

三浦理子、酒造メーカー営業部勤務1年目。

一生の不覚！！

2話

『あゝ・・・・・・・・、参ったなあ・・・・・・・・』

出社は思い切りギリギリ。

逃げるように急いで帰って、シャワーを浴びて、情事の跡を消して。

乾かしきれなかったゆるいパーマのかかったショートボブは、ワックスをなじませてごまかした。

寝不足の顔は、いつもと違うカラーのメイクでカバーした。

『つうか、眠い・・・・・・・・』

勤務先の近くのコーヒーショップで、大好きなカフェモカをタンブラーに入れてもらう。

それを手に営業部の自分のデスクへ向かう。

「どうした、三浦。具合でも悪いのか？」

声をかけてくれたのは、タカツキ トオル高槻 亨課長。

次期部長は有力だって言われてるやり手の営業マンだ。

今も大きなプロジェクトに関わっているから、成功すれば確実になるの噂。

まだ1年目のあたしにとっては、雲の上の先輩だ。

『いえ・・・飲みすぎというか、飲まされすぎというか・・・』

「珍しいな、お前ザルだったよな？」

『そう思ってたんですけどね・・・昨夜はどうもテンションが・・・』

「そうか、まあ無理するなよ？だが、早退されちゃ困るんだがな」

『大丈夫です、そこまで酷くはありませんから』

そう答えると、コーヒーを口にする。

・・・なんだか今朝のカフェモカは、すごく苦い気がする・・・。

大好きなはずの味が、いつもと違うだけでテンションが落ちていく。

そうして、今日のあたしはボロボロばかり見せ付ける羽目になってしまった。

それから数ヶ月は、ものすごーーーーーく、平穩そのもの。

彼氏はいないけど、仕事は充実してたし。

営業先でも新しい商品を仕入れてもらえたり。

毎日楽しくて仕方なかった。

その日、久しぶりに行きつけのバーに出向いた。

『こんばんは、タカシ君』

カウンターに5人、フロアーには2人がけのテーブルが3つと4人がけのが2つ。

その間をオーダーされたカクテルを運んでいくような、こじんまりとした店だった。

友人に一度だけ連れられて行って、それから一人だったり仲間とだったり……。

いつでも色んな洋楽……だいたいハードロックかメタル系がかかっているにぎやかな店だ。

でも凄く居心地がいいので、大好きな店だった。

あたしは大抵カウンターに座る。

定位置は、右から2番目のスツール。

そこがバーテンのタカシ君の目の前になるのだ。

「のりちゃん、久しぶりじゃん？」

『うん、忙しかったー』

「それは何よりじゃん。注文は？いつもの？」

『ううん、今日はなんかさっぱりしたのがいいな』

これと指定しなくても、その日の気分で色々作ってくれる。

・・・たまに凄まじいの飲まされることもあるけど・・・B
29とか。

あれはいくらザルでも、マジで死ぬ・・・。

今日出てきたのは、そうじゃなくてよかったけど。

やっぱりお酒は緊張しながらより、楽しく飲むほうがいい。

心から思うよ。

今夜は楽しいお酒になってよかった。

カウンターで隣り合わせた人と、ジーンズの話で盛り上がった。

あたしがお気に入りリーのバイス501を履いてってたから、それに気付いたその人が声をかけてくれただけ。

見た目はいまいちだったけど、凄く話題豊富で楽しい時間だった。

タカシ君とも音楽の話とか、カクテルの話とかいっぱいして、気付
けばもう閉店の時間。

帰り道はいい気分だった。

うん、そう・・・いい気分だったの。

途中まではね・・・。

3話

「理子？」

あんまり聞き覚えのない声に首をかしげながら振り返る。

『・・・・・・・・』

見なかったことにしよう。

うん、多分気のせい。

きつとそうに決まってる。

だってそこにいたのは、あたしにとって一生に一度の大失敗な相手よ？

見た目はさ、海保のドラマの主演やってたなんちゃらいう俳優にそっくりなのよ。

黙ってたってるだけなら、好みのタイプ。

だけど、好みのタイプでも忘れ去りたい人なのよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・浩太郎だった。

「理子、今さ見なかったことにしようと思ってない？」

はい、そのものずばり、思ってますけどいけませんか？

「酷いなあ・・・・俺は一度も忘れなかったのに」

そりゃあなたの勝手なだけであって、あたしとは関係ないじゃないのよ・・・・。

「ん？俺の勝手で、あたしとは関係ないって？」

あれ・・・・？なんで気付いてるの？

「理子、駄々漏れしてるよ？」

『え？』

「あ、やっと口きいてくれた。よかった・・・・」

そう言った浩太郎に、背後からむしゃぶりつかれたあたしって？

なんで？どうして？ガオガオブ・・・・違う、これは姉の子供が見てた幼児番組だった。

『何か御用ですか？』

「あ、冷たい。あーんなに愛し合った仲なのに」

いや、それはあなたの勝手なだけであってー……。

「だから口に出してるってば」

あちゃ……。またやつちやった。

「ま、いいや。ここで会えたのも何かの縁があるんだよ。そう思わない？」

『いえ、別に……。』

「うわー、冷たいっ！ベッドの中は違うのにねえ」

無視無視……。こうゆうのは無視に限る。

「とりあえず、改めまして、俺は藤下浩太郎。23歳。独身。出身は熊本県。仕事は建築関係。収入は……。『いや、収入まではいです……。あ、そう』」

『で、何か用ですか』

「理子に惚れました！結婚前提に付き合ってください！」

は？今、なんか言った？

耳掃除はしたばかりだから、聞き間違いかなあ。

うん、気のせいに違いない。

頭の中はそうやってパニックになって、ふと取られた左手の薬指

に何かがはまっていくのにも気付いてないあたし。

「これで理子は俺だけのもんだから」

そう言って背中に回っていた手が後頭部に移り、頭を抱きかかえるみたいに上向かせて唇を重ねる。

あたしの身長は153cmしかないのに、浩太郎の身長は180cmを軽く超えている。

だから抱え込まれると、逃げ出すのは容易じゃない。

なのにこの優しいくせに、噛み付かれるかのような激しいキスは事実として苦しすぎる。

激しいってのは違うな……。

なんだろう……。

魂まで吸い取られそうな感じ？

妖怪だったのか！お前は！！

「俺もう理子以外の女、要らない……。だから早く結婚しよ？」

『あたしはまだ社会人1年目なので、他を当たってください』

「無理、理子じゃないと俺は俺じゃなくなる！」

そう言って再びあたしを自分の腕の中に閉じ込め、唇を蹂躪し始め

た。

4話

『だからね、他を当たってっていつてるじゃないの!』

『やだって言ってるでしょ?』

『ふざけんな!! あたしがやだって言ってるの!』

「素直じゃないと、かわいくなるよ?」

『かわいくなって結構ですが』

あー、なんかもう相手すんの疲れちゃったかも。

『帰るし。ついてこないでね?』

せっかくの楽しいお酒だったのに、あとが悪いつつうのよ。

追いかけてくる浩太郎を振り切るように、タクシーに乗り込んだ。

追いかけてくる気配もなく、自宅に到着したあたしは荷物を放り出すとまっすぐにバスルームに向かう。

熱いシャワーで、お酒も忘れたいことも、すべて洗い流そうとして。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ほんとは、お酒なんて飲んじゃだめなんだと思う。

だって・・・・・・・・・・・・・・・・・・来てないんだもん、アレ。

最初はストレス性の物だって思ってた。

だけど、それが続いてるって事は・・・・・・・・・・。

あたしはまだ入社1年目で。

今こんな状態になってるのは、正直困るんだ。

もし、本当にそうなら・・・・・・・・・浩太郎・・・・・・・・・だよね？

『はぁ・・・・・・・・・・』

頭からシャワーを浴びながら、出てくるのは溜息だけ。

あの人生最大の失敗の夜を、最初からやり直せるならそうしたい。

『検査だけでもしなくっちゃなあ・・・・・・・・・・』

買ってきた検査薬は陽性、仕方なく土曜日も診察してくれる病院に

足を運んだ。

そしてやっぱり、あたしは妊娠していて。

既にそういった処置は不可能……って言うか、エコーを見た瞬間、そんな気はなくなった。

だって、どんなに小さくとも、しっかりと人間としての姿かたちを持っていたから。

父親が誰であっても、この子はあたしの子だ。

相手が、何を考えてるのか……よく分からない男であったとしても。

問題は仕事で。

あたしは営業職だから、大きくなるお腹で勤務するのは難しくなる。

頼るべき親は、近くにはいないし。

幸いだったのは、勤めた企業が産休を取りやすく、復帰もしやすいこと。

とりあえず、休み明けに高槻課長に相談してみよう。

………って、そこで気がついた。

あたし、浩太郎の連絡先、知らないじゃん！

いつも神出鬼没で、どこで出てくるかわかんないし。

結婚しようなんて言ってたけど、それもどうせ気紛れに違いないし。

子供が出来たなくんて言ったら、きっと逃げ出すに決まってる。

ま、とりあえず、今のところ悪阻もないし、お腹も目立ってない。

やれるところまでは頑張ろう。

週明け、あたしはまっすぐに高槻課長のデスクに向かった。

『おはようございます。あの・・・ちよつとご相談があるのですが。お時間作っていただけたら助かるのですが・・・』

「深刻な相談？」

『ある意味では・・・』

「そうか、じゃあ・・・今日の終業で構わないか？」

『はい、勿論』

「うん、じゃあ食事でもしながら聞こう」

『申し訳ありません。よろしく願います』

課長がどう思うか、どんな判断をするかは分からない。

でも、この子のためにも最善のことをしよう。

あとは・・・・・・・・浩太郎。

どこで誰に聞けばいいだろう。

やっぱり、あの店のマスター・・・・・・・・？

知ってるとしたら、あの店の関係者だけだろうから・・・・・・・・。

ちょっと面倒・・・・・・・・。

そう考えたら、やっぱり溜息しか出てこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1666t/>

God's caprice

2011年10月7日17時48分発行